

藝云備孝義傳三編

賀茂

卷八

御家 達

和書門類			
三	二	一	
六	九	六	
五	九	七	
五	五	一	
類	號	函	架
冊	架	函	冊

內閣文庫			
五	三	和	
八	四	書	
函	六	五	
一	五	五	
五	七	冊	
架	冊	號	類

內閣文庫			
番號	和	34655	
冊數	19 (8)		
函號	158	25	

第六 新刊 湖本

共十七



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



藝備孝義傳三編卷八

安藝國賀茂郡

阿賀村久兵衛後家せん

下市村半三郎伴當與八

同村甚右衛門手代傳藏

同村惣七

風早村里也

奥谷村七右衛門同兄只右衛門同姉大祐

吉川村よ免

宗吉村龜藏夫婦

三津口村善藏夫婦

竹原下市村

津江村社人出羽妻たつ

土與九村八十八回乃義尾村利平次夫婦

吉行村超道 下野村已助

同村後十郎 津江村作次郎

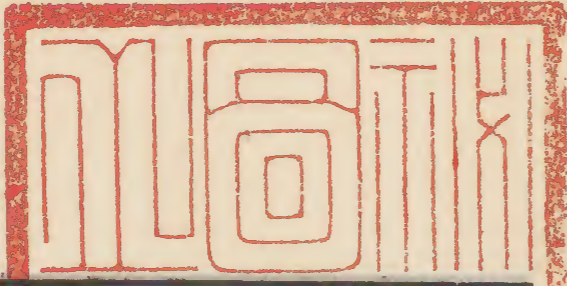
造賀村助吉 同村久三郎

不常村半三伯判官

阿賀村久兵衛

安藝國阿賀郡

藝備孝義傳三編卷八



藝備孝義傳三編卷八

賀茂郡

阿賀村久兵衛後家せん

せんハ廣村好兵衛が女をうりかひせしつと柔和貞実よ

しハ舅姑および夫よけりあつと厚く夫久兵衛も

温順あるそのよ家内と睦まじく舅姑ともにも老て

同く是故なやむ舅ハまゝ腹痛の病さありて

久しく苦むると夫婦おそろりて療養よ心をあ

くれど久兵衛ハけなぐ生業よ暇あられせん一人

側をたまあれどして保養せり。舅まもる老傾きて金銀の
 比ふ。ころころ二便をけく。夜の寒度とあく起出けるがせん
 必はきとひゆき。寝袋冷る時ハ温め。二便の穢あきん
 入よ。知らせむ。とくこれとさよめ。結るかこあくけ之
 くれど。舅ハ老耄して事とことまきむ。やもまれば
 すぐあきむのこひはのり。きむた〜〜〜あり
 くらむせんいつちやいらう。承順ひ。ま〜薬と〜〜ひて
 飲む。ころあれむ。は〜〜よき〜〜〜
 知らせむ。して進む。あ〜。恰も小兒をあ〜〜〜。



老翁傳三編

魚いともより舅姑ともよ啗むとらうあまふ日く
 らづらう買來り。鮫食まゝ粉團の類とも時よ應どて
 供へその凌然を慰めらる。姑も夫病よかりなれば
 醫藥のことかのかざりあけきどそのかひもあま
 舅もまゝ遂よ悲しくあり一ふせんが悲だといへん
 かゝあく後のことと意よ替まてあまふはけりあまふ
 生よつらうよあまふ見入る人よあ涙とこがけり
 姑の病あがらぬれど老の病れ重々れはこらふこと
 介保まらるといよく厚一夫らせ一後り田畑とが人よ

あづけ。妻あ姑の看癒しつ。債作してかきうよ生理と
 較多々れが親しきものせんは向ひかく賢くあり
 上の本宅をうりえらひ牛屋とあつらひて住居せん
 らして後あらめとすめ諭せよせんきて。それも
 さうとあひさあんど姑よ伴しきさふと見せ侍らんも
 心あきとあれはが身艱苦を志のび勤めをこらふて
 姑のあらんかざり。このまゝに住せたしと答へれば
 んぐ感ドあひ救助でかれが志と遂しむ。寛政十一年
 未の十二月。米五俵のひて費せらる。文化三年。先公



天祐遊獵の時召見せりて鳥目一貫文と与せられたる。

○下市村半三郎伴當與八 ○同村甚右衛門手代

傳藏

與八ハ八歳の時父文次郎とをやりて十五の采より。今の半三郎が父半三郎と仕へ後の伴當と務めたる。半三郎ハ諸不問屋とありまゝ酒とほくり。塩と焼き。廣く諸國と商せしが病と得て死すなり。今の半三郎十采よそ家飯継ぎしが高率とをうぐり。家計もや衰へけふ。与八時よ歳四十むろり。生質萬實

よそ先主の意よもかあひしゆえ親類の者より家の事よ與八よまうせられ。與八ひととる精力とあり。幼とよりたて。家業よ心と碎き。病疾く起て。それくの業と家衆よ課せ。夜ハ人の寐し後まで翌日の業とまぐり。勤る者と寝め。情とものと諭し。弟の事誠ととて計ひし。半三郎もよく生きたる。町の年寄とも務るよあり。あまのこの奴婢までも皆かれよ心服して。一家敷朴の風とあり。産業も日増あけて。采も先主の時より七賑ひとれ。人よふとの忠勤と歎稱し。諸國

より入来れる高人もその行を感し大坂より下瀬の
 なるまでかゝる家来を見及ぶと稱しけるとなりん
 歌もぐよ六十五及びこれ半三郎かきよ向い今より
 己が家のと存りて妻子の孝養をうけよといひこれど
 ある晝夜五家よゆさてかひぐく働きたるそのよ
 官に受えしうは貴し米五俵をのみ文化九年申の
 十二月のころあり与八五家よけりあること四十九年
 たりしよかきよ母よ孝しけり後よ己が給銀と
 送りてやまらるるよ譽させけるとぞ。○傳花の父を

清三市といひて豊田郡河内村の民あり傳花十三歳
 より甚右衛門が父甚太郎はけし甚太郎は穀物燈油の
 類を高い塩田すも運船をも持ち家産頗る大なりしが
 傳花三十五の癩甚右衛門死し甚右衛門はつらつら六歳より
 家産少く衰へると傳花よく獲立商の業をせげと
 心を盡し父を碎きたるれば家産もゆさるるなりぬかて
 傳花伯父平六が義子となり妻をも迎へしが平六よ
 けりあること甚厚くかきよ五家よ往來して事成謀りける
 後その妻を娶りやりとれば主人より再娶ることとぞ



まゝむれど家累ありてハ仕の妨あらんことをおぼひて
肯んぞ歌五十餘り。主家の務をあたふこと四十餘年。
その忠勤露たゆまざりければ與ハと同ドク賞せらる。

○同村惣七

惣七ハ六果よして父兵三郎よとあれ家きりめて貧しく
生計に苦しければ惣七ハ十二三歳より人よ仕へ
給銀と分送りて母が立腹したすけとやうなる。ひと
あるよ及びいふよかして田地を買求め仕をやめて
母とやゝありやとおむひ。日夜鍛苦してやうくよ

銀子五百目と蓄へしつゝ。嫁夫よあづけて。不どよま
田畑も何らば買われとたのむ。嫁夫おむひぶる
費ありか。かの銀をけしむ。ぬ母怒りく。子くら運坂
取かへせよといひくれば惣七答へて。母人のおるせ。
理よはれど近き親類さればさびしき責も何あり。
今かゝるこそある。前世よ人より借銀せしことむむ
ありて。その報よとやとむひ。暇らめくやとつひて。
母とあぢめおさ。す。三四年を公。三百目をうりれ
銀と蓄へ。遂に仕をやめて。カ一の田畑を買ひ。農事の

休みの備夫あどして母を養ひく。日く然いとく起て
 母が寝處の烟草の火をとりゆき食物をも母がたより
 よきやうにわがあきてそらきよ出食事のころり必
 帰りうかひ。夜はいつも側ありて接ききり。暑寒も
 随ひ急を配りて。そらききり。母のことと。福急や
 生積よて。事よふれ怒言ふこと常あり。が惣七よく
 承順ひくれは。後ハ母もかれをききること。深くかき出
 ぬること。遅き時ハ。や異事あり。や。食事をも
 あさむ。門よ立て。待とびくれば。惣七も。その心をきり。



いつも事修るやいあやいそぞろけりけること母は
 老てい生きたるのため外へ出るよ母一人を家におくも
 心あらざいふまじき心と誓いあしが一人の姉兄と
 泣いて寡となりしを慰むおのが家をきく母とせよ
 姉がとくに同居し力あせり孝養を盡しぬ後母
 老老して同居せしをききたまへこの家よあり
 一とおのひてしが家はゆらんといふことありその
 及ぶよ母を泣れしを信し家の事を猶詳し母が
 心とあぐさむるよ見る人感ぜむなりしを慰むある

年より病よりい心定らざるは怪しきこと
 ありしが母に泣くあるの奇特ある前よ妻なること
 せりしとまん母死せし後費しき目七貫文と下る
 傳説と同ト年あり

○三津口村善蔵夫婦

善蔵は文太郎が子あり妻のきく同村の漆匠兵蔵が
 女あり夫婦継母よけりあること尊とせし文政六年
 未の五月孝しく米五俵とあり同日十二年丑の六月
 再び前のごとく費と費りけるその状と按むるよ善蔵



二歳よりして母よをあれ継母に養はる。継母の母が妹よを
 二人の男子とらめり。善花成長まるとして随ひて孝心深く
 嘗て父母の心よ省しらとあり。廿五の歳父まを病て
 死せしむ。僅ある田地を耕し妻とせよかせとてとら
 きて。継母と養母弟とを養ふ。あはれに継母もやうやう
 長たれが二人とも別宅させ。この妻もありけり。が
 一人の弟文次病て手足あを。生業もあはらざるよ。その
 妻頼あきとのよ。病る夫と小見をきく。親のよを
 歸きりくれが善花夫婦日ごとく食物と。文次が許よ

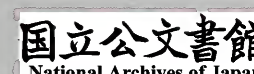
持まらび時々の衣服ともおくりあきて。心のよを
 せり。善花おのが家口六人よ。文次父子をあをせり。
 八人よ。あふあれが。耕のよを。續くよ。あはれが
 桶匠の業とやらひ。中々傭夫とて。おの未ゆより起出
 夜の夜ままで働けど。おの夕の食をく。とよ。母が
 好める酒の日く。これと進め。とらとあり。母ま老て。い
 殊よ。意を配り。夜寒の時の衾の着せと。身ひ。夫婦母が
 側よとひ掛して。おと以て温め。あまよも。あはれうやう
 食物とすめける。母はよとむつう。と。生質あふ。

善花夫婦よく其意を分けいさうその心よさうかき
 して孝養いつらぬくまをうり。母が歌の七十に
 あまねど孝の衰へど顔も亦常よりうつくしかりけり。
 人或はその健あると稱されば母養て夫婦のよれつと
 よく我よはくす。病身ある文次とあうくつこたり
 侍ふ。我よ懇あるよりも娘く。何ひと心よ適う。
 らしかりけきば、さういひとぞかくて文次の
 日と逐て病を治くれ次の弟植花もまた病よかり。
 遂に向づく死にける。看病よりして後の事まじり。

この善花夫婦厚くとりまうし。文次が孤子をも取り
 養ひく。さうまわ家まわく貧しきよ。陥りれば親に
 この人をかくらひ。頼母子して救いをやと謀り。に
 求めずして加さる人多くり。これ夫婦が行はるよ
 人を感ぜしむ。よまきなりと人よ稱あし。

○風早村

まうら。好右衛門が女あり。好右衛門の浮遊のよきよ。
 借金を借。が。老いて。の。を。さ。も。か。
 母も向づく。齡か。い。さ。を。あ。り。く。

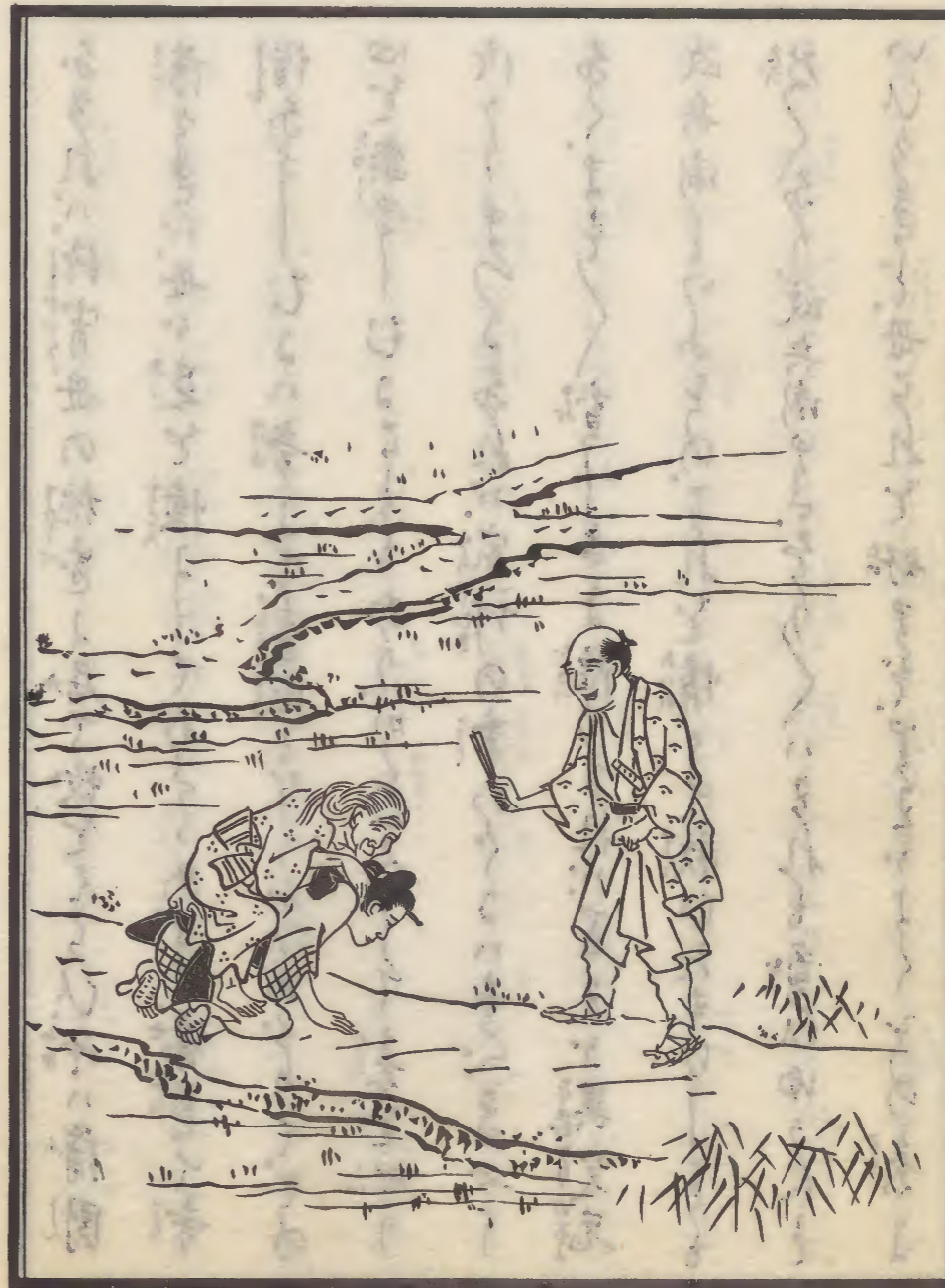


なり。さうして、いそぎをしたら、いそぎをよめる。いそぎをよめる、孝く。
常に入ふ。産のきく。素とあひて。さうして、代り。サリ。
むりの。錢をひく。孝の。資とす。きく。村内。素を。
賣買。よ。い。その。價。定り。あれ。人。ま。ま。が。孝。よ。い。
資。よ。い。その。價。増。て。買。う。る。と。う。り。ま。ま。
や。り。き。て。他。へ。ゆ。く。ま。あ。ら。ま。お。飯。を。二。款。よ。ま。ま。め。
お。さ。午。飯。の。頃。人。の。休。息。す。る。時。お。の。ま。い。ぬ。り。て。食。物。を。
と。ふ。す。と。産。の。れ。一。家。の。幸。也。も。欠。ら。ら。ま。村。の。あ。ら。い。
よ。て。産。ひ。一。と。の。よ。晩。飯。後。飯。を。あ。ら。ま。さ。ら。ま。た。ら。ま。が。

ま。ま。い。い。つ。も。お。の。が。食。を。か。ち。ま。ら。取。り。て。親。に
ま。ま。め。一。つ。ば。産。ひ。一。家。の。心。を。感。て。親。よ。お。別。ふ
と。ふ。べ。ら。れ。ば。汝。ら。ら。ま。食。よ。べ。一。つ。と。か。さ。く
辞。ま。て。後。の。人。よ。り。ま。く。ら。ま。ハ。本。意。あ。く。思。ひ。て
あり。親。痛。ま。ま。ま。家。よ。の。と。あ。り。て。信。心。一。巻。紙
側。を。ま。ら。び。一。つ。も。月。一。ま。ら。ま。か。く。て。父。の。老。病。も
加。り。ける。よ。薬。を。服。せ。一。む。る。力。も。あ。ら。ま。思。ひ。ま。ら。ひ
一。つ。が。村。の。醫。某。が。許。よ。ゆ。さ。ま。め。ま。ら。ま。ま。ま。ま。の
ま。ら。ば。薬。の。料。と。ま。ハ。カ。お。ま。ま。ま。ま。一。我。身。よ。か。あ。る

事もあらふ力のかぎり働きて報ひなすべし。憐れむこと
 父の病を救ひなすべしと言を承けてたのむれは醫也。
 此のよかき孝をめでしむ。さほぐよ茶を施し
 くれど遂よそのひあきておまうりぬ。まうりおまの
 あたり生理の窮よ心いられ孝養のあやよ任せざりし
 ことの悔しきこと。ふうく歎き悲しける。まうり。今も母
 のこなれはいよく懇しけく人に産まうりしもの。
 遠きにゆくが書い熊砂糖のたぐひとあり。凌然とあぐ
 さめ夜の酒をさめめぎし。いふことや。夏ハ蚊情

かるれば終宵母の枕をよ居て蚊をさしひ冬ハ蒲団
 薄くする母が足を懐ししてあやめす。脊負て寺
 詣あさむむるハ常にて。幸道とてくおひめがりてその
 心を樂まむむることもあり。かく一人して意を配り
 けうりまうりあれが家計の事かぐるハまぐさやう
 あくまきく。貧しきよ。陷りなれば。まうり。異父兄
 政兵衛とよその。これを憐れて救ひたきけし。まうり
 けうりあり。政兵衛まうり。ハこれも負ひゆん
 いひるまうり。母これを好中。まうり。まうり。まうり。まうり。



かあつるよよりてやるべし。かゝるものあれば聖人と
 求むるもの多くあつらん。母とらうともよふやうに
 ともありなれど人よゆきての母をやさうあつて
 心のまゝにや。雞をと思ひて皆かゝいあつける。
 されば屋敷もかまが玉性よめで。店租をもとらうが。
 後の近村までもその行を傳へて。世来のものもかれが
 宅奴訪ひとの贈らうともあり。一あり。遂に官に
 きらえ。うが。文政六年未の五月。米三俵賜ひて。賞せ
 らる。享和三年三十五なり。その頃公子長懋遊獵して。此

村を過りて一時女の老母を負て路の傍に伏し居
 るを見ゆひて問せむひしは、母をこころひ孝女のよしと
 村長等こころをりたれば、更よ人をこころで、かれが家よ
 取りてのさ福を見せしめ、物あそむひしをて、天保
 六年未の十一月、今公遊禰の時召見ゆひて、鳥目一貫文
 下さる。下の龜花まぬ
 まめで並よ同し。

○竹原下市はる

はるが父の善右衛門つとひて、定れる生産やうく、家
 をあつて賣り、老れて庄吉といふと、れと婿養子といふ。

子二人ありしは、家程もあつて、父の身まうり、庄吉の
 母が心よ適はざりて、遂に女をやりぬ。その後養子と
 勧むるものあれど、はるは母が心とこころのさへん、こころ飯
 思ひて背りぬ。たゞ母の表とのこころ、或ハ本筋と
 織りあはる人よ産られあつて、心細くも煙とたて
 るり、かゝて母七十にあまり、中風とやめて、手足かふ
 つぎすりたれば、はるは殊更こころをこころり、食物より
 しく二便のうすまが、後くるくまあつて、こころ生計のため
 外へ出るこころあつて、心の家よあれは、時ぐぬりて母が

安香を伺ひくると日く、乳より夕までかせごをてらしけり。
身の疲るゝともおもはざばしく、母をあぐさするごとと
急らば、貧くさうよりも、昏をむきて、茶とさしめ。
母が身は、冷もまて、四時にも火燭をまうけ、さほくは
銀帯にて介保せり。されど、母は久しく痛て、心ひぐ。
いやく叱言、こゝろもなしく、あまよはせさうもあづ
くめるも、やまあ、言をやううよ、いやくひやごめ。
母が心をわらばく、子の兼蔵やうやく成長し、十二
三よありしに、どの頃より足坂痛く、うち脚くれば

も、療養の費とかな、貧くさかり、れど、母の養を
かぐること、程、経て、兼蔵ありく、るべし、な、り、に、が、
あ、痛、か、ら、う、そ、て、耕、作、ま、役、夫、あ、ど、の、と、と、を、ま、う、え、
ざ、れ、が、人、よ、仕、ま、ら、の、給、銀、を、ひ、て、家、に、分、り、送、り
く、ま、い、け、さ、う、助、と、す、る、よ、ら、な、も、母、は、ま、ま、く、惱、ま、
し、う、む、さ、く、産、め、れ、し、も、ゆ、う、ぞ、日、夜、側、に、あ、り、て、賃、は、
ま、る、れ、な、れ、ば、家、い、よ、く、ま、び、く、僅、よ、貯、り、衣服
調、度、も、ま、お、母、が、養、の、為、よ、う、り、ま、ま、ぬ、組、合、の、と、れ
見、る、ま、堪、む、主、顧、家、よ、あ、か、さ、救、を、ま、ま、と、論、せ、し、ま、

此の人の救と云ふ心ありきと云ふ屋祖
 の事と免さるるもあはれ上もあはれあはれんと
 いひてを産まざるて速よその終らひのどくなく
 けるも母の遂よおのりくさるる七年の間看病
 たゆまなく身の終も正しく人よあはれをさるる
 文政八年酉の七月賞て同日七貴文と賜ふ
 ○奥谷村七右衛門同兄只右衛門同姉た孫
 七右衛門の父と妻の母よ幸て孝心深く幼き時
 より一たびも母の意よさかひくことなく長あまよおよび

妻とむしてせむ親よけうりまつりぬ母に故とむむ
 毎よつのも彩よ炊まて温あまのそとあまの終ら
 かあらび湯とめて鹽を製とも日ごとに結して清ら
 あらうむるあまの意よさかひくことなく長あまよ
 よて孝心のあつさ終らおのりくさるる七右衛門の
 ざれがそのゆくと思ふ慶へん七右衛門つらも脊負ひ
 ゆもいよる農事志げも時ととも親の意よさかひ
 いさうも厭ふをさるる城下ある佛護寺ハ路のぞど
 六里をくり隔りけるがられも脊負ひてはれゆき

くる兄の只ち妻の別居して、鄰は位々常山來りて
 孝養をせしむるに、七右衛門は妻ありて、七右衛門母を
 負ひて、孝養をせしむるに、後より往きて、かゝるに、負ひ
 して、姉のたねの同村の友右衛門が妻とありけるが、
 夫は妻ありて、厚く孝心を深し、その家母が許して、
 十二三丁も、せりぬるに、晴雨の分ちなく、日に必
 二之及も來りて、母が安否を訪ひ、及ぶと、あり、むらりの
 不きも、來りて、母は、夫も、奇持するものよ、
 彼より、ゆるものあき、必ち、贈ら、む、母ま、老



よひひ九十は終りくれればたねも六十はらるるまで
あふ終り来りまきゆつこと少きむうしよ業あらむ
只右衛門つ七右衛門つもこゝろあ歳五十は過む三人心を一よ
し孝道おこらば妻子におもひ皆睦しうき
まてて農民の常として田地は水あつる時互は合算
意わりやもくれれば争の端ともありくれど七右衛門
兄弟はおのが取るべき水のゆるさうに一漏もさう
ざりしとありその産直あることまかしのごとく
母死せしあくる日七右衛門つ只右衛門つにおのく

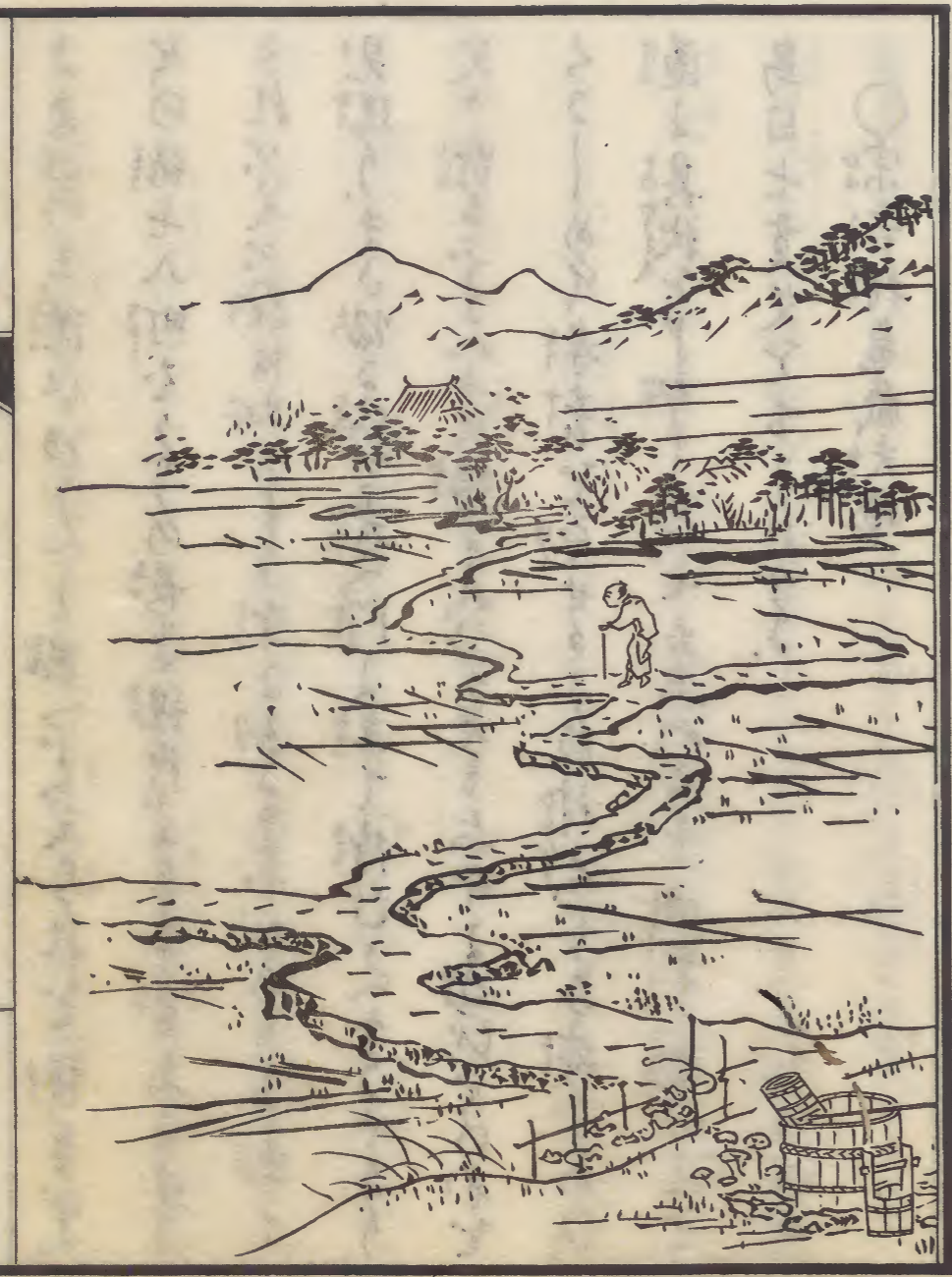
鳥目七貫文たねよ五貫文あり。何れくその行を獲る
さふ。文政十年庚の正月なり。

○吉川村よ免

よ免いといけあき時父勤十郎よえ免継父と又十郎
といふとてる田地といひいうむりもあく家といめて
免くればよ免十家むりより人よ仕へてその
行の厚きこと幼きものよ似て長あるにまこと
何事の家よてもよく主人に忠にありし寺家村の某が
家よひ十七八年仕へてぞかれむとより孝心ふうく

夜の深きまで主人の事を泣く泣く人の寝る比より一里も隔り親の許より安否を問ひ常に
おのが給米をわけて親が後妻をたきけすおれ又定まる
食物の外は主家より與ふものありとせしむるも
口よの事ばらばら親よ送與ふ此あつりの習俗
来よあまび洗濯日とてめ一つふものよ五日の晩と
さらさらありよ免れ五日れら一日の親此許よ
来りて泣くまらり残る四日ハまらこ主家よ悔りて
泣とめけるされど暇あそ一日数の内あるよより

その百の産ひ一どく賃跡と与えられその跡よ
あらしき食物とそのへ親に贈りてまらこむい父さよ
よ免れ婿お子せしが家の貧しきを厭ひて悔まりぬ
後母の病よ罹りひさしく瘞癯となりて遂にまらり
父のいそ老々ればよ免れ仕をやめて家よ悔りひそり
賃尾して父を養ひおのまら常よ飢を忍びて父と
食よ飽しめ己が衣の膚もおろひかぬまらこ父よ悔り
わらととあへ寒あまおのが倉どもぬぎて父に
被せしとあん父の老く隣村の正福寺といふは



よ免つつも、後ひゆんと思へど、父られを許さず。
 この途七八町をうりの長き堤にござりて見えたり
 られば、父が家に出るより寺にまゐりかゝりず出て
 見送り。まさしく此を考へ門に立て待びえりたり。
 父が影まで八十に餘れば、よ免も六十及びその身を
 くるりめり孝義と辱せるさゆ。村人々も感あり。
 遂に其状を尸おしうば七右衛門のりて、同年貴し
 鳥目七貫文を下されり。

○宗吉村亀蔵夫婦

龜蔵は、赤吉が子あり。ちやく母に離れ、継母に育る。年
 長り、正力村恵助が女をめでり、名を勢とて呼ぶ。夫婦
 交親よけり、つらと並あらん。父の病よかりて、遂に
 うせしが、その病中貧しきあり、つらも醫と二人を遣へ
 四五十日が、るど、晝夜帯と解くことひく。湯茶もすこ
 その時とたぐも、食物のことより、病せ起し、抑搔す。
 玉らぬくほありける。れち、継母よけり、つらといよく
 あつて、夫婦心と一よして、その身の衣食の乏しさを顧む。
 たゞ、母の養、どのとゆたうにせり。夏の比、母、痰とせり。

しく其しき坂とて、勢さ、常々母の衣を洗濯し、日く
 晝のたび、夜のあまびかあらば着うへさせ、冬はあまを
 わくろく、一爐は火をたやまざりて、寒きと忌まじくむ。
 菟花、農子の餘は、他へ往て、故物に賣買と、くるぐ、近き
 わりよなれば、去りて、悔りて、母の安否をうらむ。悔りて
 父へゆけば、具んそのよしと告げ、なまの事とよしりて、
 妻よ志め、一家とある時、母へ室を暇乞、一ちや幾度も
 たちをとりて、恙なく居あつとくりつ、一いひて、近隣へも、
 母がごとくをたのむ、ゆるさ、終りて、近影のそは、偶に、

母がやうきと云る、Q、まが門は、入るに早も、母に言と、ゆ、
 側ゆきと、そとを悦び、取ゆり、一いひて、まむむ、られ
 考ぐの事あるよ、いつも、そのさ、留、ね、屋、居て、お逢ふが、如く
 までありける、母まま、く、老て、弟よあやこ、さ、い、で、ま
 くれ、バ、菟花、商、出、る、こと、と、やめ、た、が、村中、よ、て、人、に
 産、れ、あ、ど、く、く、と、ま、ら、か、保、よ、れ、か、と、考、一、夜、寐、て
 後、も、夫、ぬ、い、く、た、び、と、む、く、起、出、て、母、の、ま、ご、ん、と、伺、ひ、ぬ、
 母、歩、行、り、が、く、く、む、り、て、ハ、菟、花、つ、ま、よ、負、あ、り、さ、或、ハ
 本、欄、よ、乗、せ、夫、婦、昇、さ、行、て、慰、む、ら、し、く、む、も、あ、り、

されハ母人よ逢ふ毎に飛花ハ人間よハあらハド神佛の
 再来あるべしといひて悦びけりと言んかきまて官北
 おさして守り祖とまるとそやく米俵まで義しく
 村の交とも厚くせり。文政十一年子の三月、賞しく
 夫婦よ米七俵とあり子四人あり。そよよく生ひたりて
 祖母およびお親よよく生えける。

○津江村社人出羽妻たつ

たつハ廣村の農民甚三郎が女あり幼より孝心ありて
 よく父母の心よ後ひ業十七をくりよし出羽が妻と

ける。舅を飛騨といふ姑ハ出羽が祖母よし。その
 腹よ三人の子あり。まて出羽が同腹の姉妹もあり。
 かく家口多きあふ。舅ハとて直よ過ぐる生質あるが。
 狂しき病ありて。やもまきまが。さうまてせやうをこを
 わらく怒り妻子といひてせうけ。姑ハまて多言ある
 うまれあまふ。家の内はよおごやうやうざり。よ。
 たつ嫁ありてより。善くこれと移らば。舅怒を度し
 毎よ夫とそとめ。大小姑とまてひて。そよかくに。身よ
 死とらけ。そよぐよひれ伏して。徒言。いさうその

心よさうそんば怒のや解るとまらうて昔とあぐ足板
 さきりつとせう〜く物語あど〜けるよより。後の
 男が孝順もいと〜おらうて怒ふ〜も稀ありぬ。
 中〜よく夫と教ひ。大小姑よ友愛あつうりぬが。
 一家おのづから睦〜くなりて。ものいひ辛〜も
 さ〜ふ。これ備よ。たつが婦道とおせ〜より。かくい
 なり〜よと。おめぬ人ぞあり〜も。男の老ゆくま〜ふ。
 重験よあり。そ〜して。身よあづ〜ぬ世の事とも。
 〜〜〜〜〜。長閑〜と。清も〜ひけるよ。たつ。

いつも耳よ口よせ〜とありかくありと曲よを〜
 ころせ又痛てま〜あえまびきぬれ。食子のたび〜に
 箸を取て哺めあど〜。事の事〜と。ま〜く
 孝義と厚くせ〜。男妹よま〜びぬたつ。幼き子二人を
 此れどの身ハ病がら〜るに。男姑よけ〜ある〜。かく
 秘ん〜らよ。ま〜紡織の〜もカを勵〜けり。
 教〜の〜官〜聞え〜れば。五た〜の米を賜ひて。
 その行を賞せらる。天保七年申の八月れ〜なり。

○土奥九村八十八

八十八ハ父を方左衛門といひ。八十八ハ母性ありて。
 幼より父母の言を重んじ。灼艾あざむく。小児の
 焼ふものあきど。親よりいひつゝ。れはいつも速よ
 か。こまりにて。灼艾。く。その親の言よ。む。さ。さ
 ら。こ。あ。は。れ。九。菜。の。母。血。病。て。醫。療
 さ。は。ぐ。お。ぬ。れ。ど。更。よ。の。効。も。あ。り。一。よ。あ。る。醫
 方。左。衛。門。と。む。い。病。危。篤。とい。へ。ど。も。な。ら。や。療。治。の。方
 あ。ま。よ。も。あ。ら。ん。菜。の。剪。法。か。も。こ。ら。が。指。揮。た。が。ん。と。い
 愈。こ。も。あ。ざ。む。い。を。八。十。八。側。よ。て。こ。ま。に。紙



安茶と煎ドさからよこすふされいっつりもしてその
 教の如くやすべければよく療治を乞ひのくと父よ
 願ひ醫よよく問ひておよそ一疾をり。壹夜急りあく
 煎茶よ意を配りいさうその法を張らむ時をも
 たぐずしてをめしうむそれあるありて母が病
 快くまりぬ醫も幼少のこのやまきいづあらんうと
 思ひいづかまが介保せるさゆを見て。実よ至孝の童
 ありと感稱しうるとやり。後父が病の時も看病よ誠と
 けくまらんと母よけうゆるよこすあらむ長きりてハ妻と

むくしてせよ父母を孝養せしが母も對口瘡とり
 おやしき病よかりて遂よ弟まうりくれハ八十八が
 悲だといんかこあく喪をけとむるこも充満あり。
 方左衛門の後妻とむうあるに及びて八十八そのいませ
 来らざるささよおのが妻を親ごとくけういおいこ
 汝とこの及来りのお母と継母あればとてその
 けくおろそやするこもあらむ。父上の心をい
 ましむべし。前の母よけくしよお母たがをけう
 まつらんとやうぶとが家よかくまべしと。海くいま

しめ始てめとりし時のごとく教諭せしに妻もよく
 夫の心せうけ後ひて病に罹りし内之ければ姑も
 よろこびてそよ〜故人之如かり不めさや〜とて
 八十八平生節儉よし〜慈愛ふ〜よく弟妹をめぐも
 一家常よむつまぶく里西とやりての塵潔と旨と〜
 村の舊弊とあら〜め〜ら〜もありて村内のもの皆
 あつさあ〜び〜り天保九年戌の五月災せられて
 米五俵とたまりける。

○乃美尾村利平次夫婦

利平次の孫ハガ子なり性質貞實よし孝心はあまご
 ぶ〜どの家奴婢も多々れと早く起〜て〜ら
 父母の飲食よ意を配り夜も爰たび〜寝室よ
 参りて安否と存〜る家産もゆ〜る〜お親せに
 常に質素と好〜く徳居とあ〜る父の練〜ら農業と
 そげ〜れば利平次の老體のけうま〜ん〜ら
 おそれ〜め〜れ〜聴入き〜らればどの意よ
 任せお〜寒暑風雨のとり心と〜て助けたらぬ
 父いよ〜老衰〜行歩か〜ひが〜らりても田畑

見あをすべしといふことあればつらも脊負ゆき種蒺の
 こころもえら父の指揮とらけかへもその意よあつこころ
 あし妻のころ大友田村三郎が女むらがこれらも
 やさしきものよて夫と回しく孝義を厚くせしむ
 村人むらむら凡て人の妻の人知ること稀あるもの
 なるよそのよびいづが知らざるものあるい金く
 その孝あるよよれるやすりといひてやうなる父のこ
 八十よりがまくり母のむらあがうけきごと老て
 足といふありくこころあらざるをりて利平次はゆよ

脊負ひ親家まゝの寺院あどそのころよあつこころ
 けれゆきあつ夫婦母の熟睡せるまで四方やまの物
 がりしていさうくも側と離るることなり利平次
 まゝ人をおそれむらむらふく友百姓の家をとりつがさ
 難さそのよび頼母子あどなりて救ひぬきよ困窮の
 そのよ妻米をわきその位父の志と継てはゆびく
 水利のころよ心と碑とこれが一村便をほしこころと
 少からび平生おのが家よめしけりよそのよをば殊よ
 恩意とくそへ若樂とともよかりよむらり

らんとせざりしより利平次が家よはく人ごと飯
杯がものをねと多しとぞ夫婦よ七俵の米をたまひて
費せらるゝ八十八と回どあやまり

○吉行村超道

超道のとと原村の農民甚四郎が子よて源六と呼び
しが多病よて人あまのそとらきとありふざれば新設
して名を超道と改め吉行村西樂寺よ身と寓せ寺の
掃除よてとととを交けぬ後どの身健よなり生質まより
萬實ありなれば主僧もたのましく思ひて寺中の事

とふかれよまをせなれば超道常よみづから鉢を執り
鐘と携へ奴僕と勵してはとめをころきまこ此寺
さきに火を罹り再誓の費ありて負債おろかりしに
いふよもしとこれと救りんと日く托鉢に出身よハ
見ぐるしと袈裟衣とまこひあこもと乞食のころと
よて家くの門よ立ち西樂寺の坊主
稱まこの
が言ありよ施し多とといひて堂裏風雨のそらひやとく
村くをめぐるとおよそ二十七八年一日も怠ること
なれればかきかかよてま久しと負債もやうやう



減^ひト^と東^{あづま}租^そむ^むも^も人^{ひと}よ^よさ^さだ^だち^ちて^て納^のめ^めぬ^ぬ寺^{てら}よ^よあ^ある^るこ^こと
 三十^{さんじゅう}餘^よ年^{ねん}主^{しゅ}僧^{そう}三^{さん}世^{せい}と^と歴^{れい}て^てそ^その^の勤^{きん}苦^く人^{にん}の^のお^およ^よな^なを^をさ^さる^る所^{ところ}
 ま^まれ^れバ^バ文^{ぶん}政^{せい}十^{じゅう}年^{ねん}代^{だい}官^{くわん}より^{より}貴^きしく^く鳥^{とり}目^め三^{さん}貫^{くわん}文^{ぶん}を^を與^あへ^へ
 村^{むら}中^{なか}れ^れそ^その^のも^もお^おひ^ひく^くよ^よ米^{こめ}餘^よと^と贈^{くわ}り^りけ^けず^ず越^こえ^え道^{みち}
 こ^これ^れら^らと^とゆ^ゆて^て寺^{てら}の^のた^ため^めよ^よ山^{やま}林^{りん}一^{いつ}區^くを^を買^かひ^ひ求^{もと}め^めこ^この^の
 山^{やま}林^{りん}い^いろ^ろなる^{なる}事^{こと}あり^りとも^も賣^うり^りあ^あり^りの^のよ^よお^およ^よな^なを^をん^ん
 典^{てん}負^ふま^まる^るこ^この^のも^もわ^わら^らら^らざる^{ざる}よ^よと^と里^{さと}正^{ただ}へ^へま^まら^らし^して^て
 永^{なが}く^く此^{こゝ}寺^{てら}の^の益^{えき}し^しる^るお^おき^きける^{ける}

- 下^{した}野^の村^{むら}己^{おの}助^{すけ}
- 同^{どう}村^{むら}菱^{かたがひ}十^{じゅう}郎^{らう}
- 津^つ江^え村^{むら}作^{さく}次^じ郎^{らう}

此^{こゝ}以下^{以下}卷^巻末^末まで^{まで}並^{なら}ぶ^ぶ
 代^{だい}官^{くわん}の^の名^なま^まる^るあり^り

己助ハとて居る田地の一石ハ満ざれば此のよ人の田を
 借りて耕化せり。その租を納るよハ繩表までさかめて
 羨ハくこれと見知らざるなり。たとい水旱水旱より
 登熟ありてさまわりとも一たびも逋賦せしむると
 やく。まゝ人と交るると貞実あれば文化五年。孝義して
 鳥目三貫五百文と與ふ。○後十節ハさやく父ハ離れ
 廿歳ハ海邊にて家を嗣ぐ。父の行りたるごとく租を
 納るごとくも。己助ハ方らざり。これハ同ト十年ハ鳥目
 五百文とあつて貴せり。○作次郎ハ父の名も作次郎と

いひて萬實のこのあり。今の此次第。中々父の風を
 おとそぎて。田租をさるごとく。己助と同トを成りて。
 貴しく鳥目二貫五百文と與ふ。後十節と同ト。まじり。
 かき。殊に貧しくて。家ハ唐箕をくさされば。この悪れ
 料も併せ恵まれしむ。

○造賀村助吉 ○同村久三郎

造賀村の内道糸谷といふ地ハ。助吉久三郎として。奇特
 ある農民あり。二人ともよ生質萬實ハ行跡正しく。
 家人もむつまぐりて。よく村の掟と謹しむ。まゝ人と

交り信あり嘗て争訟よらとなく殊は年の租と
 変んどつてもあくなかる。助吉の種まく時精しく種を
 えらび米熟もよ及てハ籾を平たつるより俵は納
 まぐあつく心と用ゐ俵を込るよハまぐに屋内と
 くらひきよめく必昼のこけりくれハ俵の作りさほ
 より結繩まぐどの法らうなること歎まれらり久三郎ハ
 助吉よりまじく何れも助吉と見あらひくれハ
 二人がまじりの数ぬの俵中よてもひととをえ目だらそ
 うらひく閩のむもそれと知らまげる一年らの村

米れみのり遊うりよ此谷の民のこハあく租とあり
 米も美いありとまんられ二人が風おのづうら
 一谷の中よ及ハぬまればとて文政六年二人よ鳥目と
 興へてその行と覚せり。

老翁作三

卷八

三

〇〇〇〇〇〇

淡路の沖に島ありて其の形如く舟なりと云ふ
其の島に人ありて其の言を聞きて其の言を
信じて其の島に往きて其の島に居るなりと云ふ
其の島に人ありて其の言を聞きて其の言を
信じて其の島に往きて其の島に居るなりと云ふ
其の島に人ありて其の言を聞きて其の言を
信じて其の島に往きて其の島に居るなりと云ふ
其の島に人ありて其の言を聞きて其の言を
信じて其の島に往きて其の島に居るなりと云ふ

